

クラブハウス主催・森のようちえん(非営利団体) (1回目の様子)

お話：オードリーさん
レポート：林 桃恵

★概要

NPO クラブハウスが運営する森のようちえんはオカナガン地方で初めての認可・森のようちえんです。全敷地面積は22エーカー、そのうち5エーカーがフェンスに囲まれたアクティビティエリア、残りのエリアのうち7エーカーが自然環境をそのままに残した森となっています。よほど極寒の天候や嵐でない限り、雪でも雨でも、トイレ以外の時間は全て屋外で過ごします。森では動物の歩いた足跡を追跡調査したり、生息する植物を観察したり、先生と一緒に子どもたちは思い思いの時間を過ごします。

敷地内に飼われているにわとりが産むたまご、とうもろこし畑、虫探し、ハンモックに揺られて語らいのひと時、りんご狩り、ブルーベリーの収穫など、子どもの好奇心を掻き立てる環境がそこにはあります。現代のカナダ人は90%の時間を屋内で過ごしているといわれています。子どもたちが大自然に触れる時間を大切に、そしてそこからサステイナブルな(継続可能な)生活を実現する力を育みます。施設は現在、主にプリスクールの乳幼児や小学校の学童に対して、森のようちえんとしての施設開放やプログラム提供を行っています。

★プリスクールのスケジュール例

09:00	登園／ウエルカムの歌をみんなで歌って朝の会・活動開始
09:15	キンディーガーデン(子どもたちがガーデニングをしている庭)で活動(例)水やりなど
09:45	森へ散歩／お話しの時間
10:15	自由遊び／砂場遊びやアートの実験
11:00	キンディーガーデンでランチタイム
11:30	降園



<朝の集い>

★各エリアの概要とコンセプト

① プレスクール用のガーデンは、たくさん子どもたちが来た時でも子どもたちが安心して遊べる場所です。特に入ったばかりの子は慣れるまでに時間がかかるので、こういった安心できる場所が必要だということです。色々な種類のベリー(ラズベリー・ブラックベリー・クースベリーなど)を栽培していて、木に生ったベリーはいつでも自由に食べることができます。

② キッチンエリアでは、畑で直接子どもたちが採ってきた新鮮野菜を使って、サンドイッチなどを作って食べることができます。野菜嫌いの子も食べ物と自分の繋がりを感ずることで、おいしく食べられるようになります。

鶏舎で鶏を飼い育てることで(くまに食べられてしまったそうですが)、自分たちの残した食べ物やえさを食べた鶏が卵を産み、その卵を自分たちがいただくというサイクルを知り、自分たちの食べ物がどこから来て、どんな風に自分たちの体に戻っていくのかというイメージをしっかりと子どもたちに持ってもらいたいと考えているそうです。また、鶏が産んだ卵を丘の上の家に届けに行くというお手伝いから、届け先からお金をもらう→

そのお金でえさをかう→鶏がそのえさを食べて良い卵を産む、というサイクルを知ること、サステナビリティや発想の転換の手助けをし、経済的な部分もなんとなく身につけていく環境づくりをしています。

また、大切に育てた鶏を食べる機会を持つことで、食べ物に対して感謝する気持ちを育てています。

- ④サークルガーデンでは、春になると色とりどりの花が咲き、パセリには希少種のちょうが卵を産みに来るので、生態を観察をすることができます。また、サークルガーデンに敷かれているウッドチップは、敷地内の古くなったりんごの木を伐採し、リージョナルガバメントを通してウッドチップにしてもらい、再利用して使っています。

- ④プレスクール用ガーデンの外のエリアは、主に森林のエリアなので、くま・しか・フェレット・ふくろう・バッジャー・ラクーンなど、色々な動物の生態系を見ることができます。川であそぶことができたり、橋を渡った川向こうのエリアには切り株があり、そこに座ってストーリータイムを楽しむことができます。

★オードリーさんが感じていること

- ①自分が日頃食べている食べ物がどこから来ているか知らない子がたくさんいる。
②子どもにとって日々の生活がすごくストレスの多いものになってきている。この環境に来ることによって、ストレスや不安感を軽減してあげることができる。
③虫・クモは大人も苦手だが、自分が勇気を持って虫と接することによって、子どもたちが安心して虫やクモと接することができることを感じた。
④子どもたちをここで保育する以前に、先生たちのトレーニングや教育をする必要がある。どうして野外で保育するのかということの意味を先生が理解していないことが多い。



- ⑤カナダでネイチャープリスクールとしてやっている所が少ない。その理由は、普段からこれだけの自然に囲まれているので、あるのが当たり前になってしまって、わざわざそれをどうにかしようと思わないため。
⑥ウェストコースト側でも、バンクーバーアイランドなど雨が多い地域には森の幼稚園が比較的多くあって、雨の日でもウィンドブレイカーひとつであそんでいるが、ケロウナは晴天が多いので雨が降ると外に行けない感覚がある。同じBC州でも気候が違い、そこの人の考え方も違うが、一度経験して大丈夫だと思えば、帽子をかぶって長靴をはいてあそぼうという気に子どもたちの方からなる。

★質疑応答

Q：自然の中がたくさんある中で、具体的にどんなきっかけ作りをしていますか？

A：3～4才児の小さな子どもたちが来たときに、あしながぐもがいたので「あしながぐもが住むお家が欲しいみたいよ。」と声をかけたところ、子どもたちが雑草を取ってきてクモのためのお家を作っていました。その一言のみで子どもたちは想像力を働かせて活動をしていました。

・キャロラインさんがオードリーさんを育てていた頃と違って、子どもたちの想像力に大きな違いがあり、その想像力の欠如の裏にあるのは、なにかをすると「だめ」と言われてしまう環境があるか

ら。ここに来て最初にしなくてはならないのは、「そうやってあそんでいいんだよ」「そういう風に想像してあそぶことは悪いことではないんだよ。」ともう一度あそびを紹介し直し、具体的に教えることから始まります。

Q：先生たちの教育やトレーニングをする必要があるという話が出ましたが、もう少し詳しく教えてください。

A：先生たちの事前学習から始めています。先生の中で1年間に一回しか来られない先生もいれば、頻繁に来ている先生もいます。わからない先生には「もうちょっと温かい服装の方がいいと思うよ。」とか「子どもたちの目線に下りてこういう風にやるんだよ。」などと一つひとつ丁寧に伝えています。

Q：教育というと自分たちは何かを指導しなければならぬという風に考えがちだが、子どもが何かをしたいという気持ちを引き出し、みつけだしたものをどうやって広げるかが大切ですね。

A：カナダでもこの15年の中で、アカデミック重視、早期教育で早く読んだり書いたりすることを教える波が来て、保育者たちも「読み書きを教えている。」というのが重要視されている時代もあった。しかし、それでは子どもが育っていかないんだということを再認識して、やっとまたこういう形に戻っていきこうという動きがみられるようになりました。

★感想

こんなに自然の多いカナダで、子どもたちが自然の中であそぶ方法を知らないという、日本と同じような悩みを持っているのがとても意外でした。小さな子どもたちがあそぶエリアに、日頃食べている食べ物がどのように自分たちの所へ戻ってくるかというサイクルを、教科書ではなく実際に体



＜シンプルランチ＞

験しながら自然な形で知ることができるのがとても良いなと思いました。

一つひとつのエリアのコンセプトがとてもしっかりとしていて、ゆらぎのないものなので、子どもたちが楽しくあそびながら、たくさんのことを学ぶことができるのだらうなと思いました。また、先生たちのトレーニングの話が出ましたが、森の幼稚園に限らず、活動から子どもたちに伝えたい事やねらいをしっかりと持つことが大切だと感じました。

そういったことを身に付けることによって、子どもの動きに対して見る目が備わってくると、こういった言葉かけをすれば良いかがわかってきて、子どもたちの可能性を引き出す活動になっていくのだと思いました。

